万情百眉

文學同志會出版

万情万眉 目次

あら玉　水の宴
みもすろ川　梅花
若菜　梅花
松の木蔭　難波の梅
春雨　花
春の彌生　花
花の宴　春の野山
櫻川　三芳野
櫻山吹　春
都の花　郭公

夏
時鳥
螢
夏
秋
しほり萩
月
青海波
須磨
玉川
水車

花染衣
水の宴
雲間の月
楢の小川
あきつ
明石
都の月
月花
菊のつゆ
古調
清き心

秋は紅葉
勢田の橋
園生の竹
冬ごもり
三番叟
友千鳥
群鶴
萬歳
相生
宮の鶯
こゝろ

冬はしぐれ
冬
時雨
君がよはひ
羽衣
八千代
祝言
蓬莱山
小野のすまゐ
琴の曲
静

白菜　吉野山
寐覺のまど　手枕
別れ　門司の關
明石　甲斐
宇治　東京
涙花　都の春
むかし男　吊魂
鶴　兵子歌
酒德頌　みよしの
武夫　胡蝶
神祇　丸木橋

柴の戸　長壽樂
景清　熊野
水の宴　決心
山家鳥　孝子
狛の渡　心から
愛涯百首
梅鶯　若菜
學の庭　撲玉
雀の子　惠の歌
春の遊び　若葉

我國は
春は櫻
師の恩
新年
書初
富士
今ころ秋
胡蝶
園生の竹
秋野の虫
殘菊
園の遊び
螢
明ゆく空
凧
勸學の歌
鹽釜
とんぼ
競走
紅葉
秋の田
千里につゞく

夜ひるわかず
あらし
籠の小鳥
盛りは今日か
すゝき尾花
廻れ〳〵
窓に日
日のかけ
時鳥
栗
橘
夜嵐すさび
白雪
今やいづこ
大内山
獨りよみぢ
百鳥
坂道おひゆく
御幸
白雪
柳蔭
鳥

早蕨
新年
旭の御旗
秋色
冬家
時計
勇ましとも
御國を守る
梅
命をなにか
進撃
月
菊の花
菊
春色
まいまいつむり
梅の小枝
駒
開校式
卒業式
月
君か御代

繪畫
江夏嵐
里の朝
勇士
海軍
閑庭の虫
春の花
夏花所感
こがは
桃太郎出陣
源廷尉
戀しき母
難破船
詠史
花は櫻
催馬樂
四季
詠史
花月の歌
平野國臣＝僧月照
明智左馬之助湖渡
春の眺望

万情万眉 目次終

万情万眉

春の部

あら玉

讀人不知

はしをとなふるすへらぎの　雲の上までのどかなる
あしたのけしき新玉の　春日くもらぬ天がしたかな

（註）星を唱ふるは元旦なり元旦四方拜の式に其歳に屬せる破軍の七星を唱へ天つ日嗣天下泰平を祈り玉ふを云ふすへらぎは天子の御事なり雲の上は大内を云ふ

（解）春秋に春王の正月と書きし如く我大君の御代しろし召す元旦の景色は長閑にて新しき年の始は春日も世の中と共に太平てあ

るわいと立春の祝言を謠ひしなり

（補）此唱歌は年中行事歌合五十番和歌卷第十一左四方拜女房の歌に

すへらきの星をとなふる雲の上に
光りのどけき春は來にけり

とあるよりとれり

水の宴

讀人不知

かやの下葉をとづるは　みしま入江の氷水
春立つ空の若水は　汲むとも〳〵つきもせじ

（註）とづるは水の凍るなり　三島入江は攝州にあり

若水は立春早旦に汲みて用ふ一年の邪氣を除くと云ふ後世は元旦に汲むなり

（解）萱の下葉を綴みなる氷が立春頃には解くるにより瓶に汲み込むがいくら汲みても〳〵盡きはしないとなり

みもすそ川

足代弘訓

みもすそ川も氷とけ　たかくら山も霞むなり
うちとの宮のへだてなく　さかゆる春になりにけり

（註）御裳濯川は伊勢神宮の御在所なる五十鈴川のことなり　高倉山は備中及ひ丹波にもあれど茲は伊勢にある山の名ならん　うちとの宮は内宮外宮なり　さかゆるは目出度なり

（解）只今は御裳濯川の氷もとけ高倉山も霞む樣になりて内宮外宮の何れと差別なく賑はしく榮え玉ふ目出度き春になりたるよとなり

梅、花

久村檢校

春たちくれば我宿に　まづさきろむる梅の花
君がちとせのかざしぞと　見るも長閑けきいろなれや

（註）春立ち來ればは立春とて舊暦の正月の節になるを云ふ　かざしは頭挿（カミサシ）の約にて花を折りて頭にさしはさむを云へり

（解）立春の頃となれるは諸の花に先たちて咲きかける梅の花を君の千秋萬歲を祝ひ壽ほく挿頭として見るさへのどかなる春の氣色じやわい

（補）此唱歌は古今和歌集中貫之の歌に

春くれば宿に先づさく梅の花
君が千年のかざしとぞみる

と云へるをとれるなるへし

若菜

菅原道眞

園生の梅の追風に　我すむ山も春めきぬ
門田の雪もむら消て　若菜つむべく野はなりぬ

（註）若菜は新菜にして早春の頃摘む草なり　門田は家の前の田を云ふ

（解）園に植てある梅の香を吹き送る風の爲に吾住みて居る山も大層春めいて來た又門田の雪も處々消えてろろ〳〵摘み草をしてもよい樣に野邊もなつた

梅花聯句

妙音院入道源資賢卿

春の始の梅の花　喜び開けてみなるとか
御手洗川の薄ごほり　心とけたるたぐひか那

（註）喜び開けは梅の花の開けると心の打開けたるとを掛けたるなり　みなるは實の成ることにて則ち實を結ぶなり　御手洗川は山城にあり又神社の前なる川をば凡て御手洗川と云ふとぞ

（解）春の始になると梅花も我々の喜びと共に開けろして實を結ふと云ふか御手洗川に張りつめたる氷も日々にうすらきて春の陽氣の爲めに融くるか如く我心の打解けた樣の類であらうよとなり

（補）此唱歌は梁塵秘抄口傳集中に上の句は後白河天皇の御製なりとあり

松の木蔭

妙音院入道

松の木蔭に立ちよれば　千年のみどりぞ身にはしむ
梅か枝かざしにさしつれば　春の雪こうふりかゝれ

（註）かざしは挿頭なり

（解）松の木蔭に立寄れは千載も經へき綠のいき〳〵としたる色が身に徹し自分も松の如く長生きの出來るやうの氣持かする又梅の枝を折て頭にさすときは梅花の爲に頭が白くなりて已に老人となつた樣に覺ゆるとなり

（補）此歌は和漢朗咏集中管公の詩に

倚二松根一以摩レ腰　千年之翠滿レ手
折二梅花一而挿レ頭　二月之雪落レ衣

とあるより取れるなり

難波の梅

穴戸眞徵

難波の梅の下伏しは　一夜ばかりの心地して
花なき里に行く雁の　鳴く音を旅の道しるべ

（註）難波は攝津の今大坂の地を云ふ　下伏は花の薫を慕ひて花の下に宿るなり　道しるべは道案内と云ふに仝じ

（解）難波は梅の名所てあれは花の香りを慕ひて其下に宿つたか幾夜宿りても厭かす一夜のやうな心地かして名殘りか惜しくてならぬるれゆゑ行く先へは足も進まぬが先づ〳〵雁の鳴き聲を道案内としてやう〳〵足を運はすことてあるとなり

（補）此歌は古今和歌集中伊勢の歌に

春かすみ立つをみすてゝ行くかりは
花なき里に住やならへる

とあるよりとれるならん

春雨

上句　讀人不知
下句　小早川隆景

あな面白の春雨や
花をちらさぬほどにふれ

あな面白の弓矢の道や
文事をわすれぬほどにすけ

（註）あなはゐゝと云ふに仝しく歎美の詞なり　弓矢の道は武道文事は學問のことなり

花

三橋檢校

花はみよしのをはつせや
嵐の山もおしなべて
雲とながめし人丸の
昔の名ところれしけれ

（註）みよし野もをはつせも大和の花の名所なり　嵐山は山城にあり　雲とながめしは歌聖人丸の花を賞して雲と稱せしなり後世人丸を文學上の發明者とも賞す　人丸は持統文武の二朝に仕へて六位に昇りぬ

（解）花の勝地は吉野初瀬嵐山等てあるか昔人丸か花の盛りを稱して雲と云はれた其風流の名譽か今に尙傳はれりと賞美せしなり

春の彌生

慈鎮和尚

春の彌生のあけぼのに　四方の山邊を見渡せば
花ざかりかも白雲の　かゝらぬ峯こそなかりけれ

（註）やよひは舊暦三月のことを云ふ　三月は草木芽を生すれば彌生と云ふ

（解）春の三月頃の曙に四方の山邊を見渡せは花盛りだか知らん白雲のかゝらない峯は一つもないさては花の盛となりたるならん

（補）此歌は續古今和歌集人丸の歌に

嵐山ふもとの花の梢まで
ひとつにかゝる峰の白雪

とある歌などの意ならん

花

三橋檢校

世の中はものかはり
柳の糸のたえやすらで

（註）ものかはりは時勢の變遷を云ふ　星うつるは歲月の改まり行くを云ふ　柳の糸を繰ると年の來るとを云ひ掛けたり

（解）世の中は種々樣々に變遷すれとも春の花はいつもかはらす時を待ちて咲き柳は節を違へす春風に糸を繰るか如く來る年も來る年も是はかりは異ることなく頼もしきことてあるといへるなり

はしうつれども春の花
くるとし〳〵のたのもしきか那

花の宴

石塚檢校

雲の上人かざして
袖の香はうちはゆる

色をあらさふむらさきの
大内山とゆふづくひ

（註）雲の上人は大内を天上に擬する故公卿を雲の上人と云ふ　むらさきは殿上人の裝束の色なり　ろでのかをりは衣裝にたきし

めたる薫物の香なり　はゆるは榮ゆるにて見立つなり　夕つく日は夕日なり

（解）殿上人か挿頭の花の色と裝束の色とか美を競ひて夕陽の映するもさばゆきにたきしめたる香をりさへいとゆかしき樣なるよとなり此は源氏物語花の宴の舞樂の處を取れるなり

春の野山

本居太平

春の彌生に野邊みれば　すみれ花さく山みれば
雪かさからぬかろこかしこ　さくらの花もさきろめぬ

（註）雪かさからぬか雪であるかいやさうではないかと云ふことにて花の盛を賞せし語なり　ろこかしこは處々方々なり

（解）春の彌生の頃に野邊を見渡すと野邊には菫の花か咲き山を見ると山には雪てはありはよせぬかと迄に白き櫻花か其處此處に咲き初めたか如何にも好き時節じやとなり

櫻川

讀人不知

ながれも清きさくら川　いろべの宮のさと神樂
花のこかげにかゝやきて　つるぎの舞のいさましや

（註）櫻川は常陸にある花の名所なり　磯部の宮は櫻川の邊にある社なり　さと神樂は土地の神樂なり

（解）流れも清い櫻川の邊なる磯部の宮に里人か奉納する神樂の劍の舞か樹木の間から赫（カヽヤ）き見えて實に勇ましろうてあるとなり

三芳野

頼山陽

花より明るみよしのゝ　春のあけはの見渡せば
もろこし人も高麗人も　大和こゝろになりぬべし

（註）みよし野は吉野にて大和にあり　みは美稱の詞なれは副へていふなり　古より花の名所なるか　中古に後醍醐天皇以下三朝五十七年間行在の地となりしなり　花より明くるは花の白き色に伴はれて夜の明くるを云へり　もろこし人は唐國人　こまは高麗にて今の朝鮮の中なり　やまと心は日本魂にて　雄々しくみやびやかなる心なり

（解）花の白き色に伴はれて夜の明くる頃吉野山の花盛を見せたならは唐人や高麗人でも我國人のやうに武々しき風流の心になることてあらうよとなり

櫻山吹

三橋檢校

さくら山吹とりぐに
小蝶のまひのはかなくも
花のまがきにとびちがふ
あかずくれゆくけしきかな

（註）とりぐは取り交るなり　とびちがふは飛ひかはすなり
はかなきはもろきことを云ふ意なり

（解）櫻や山吹を取ませた花の籬の本に鳥や胡蝶か飛ひちがひて舞ふ風情はいと面白く其眺はあかさるに日は已に暮れ行くは果敢ない譯じや

（補）此歌は源氏物語の中　頭の中將の女　玉蔓の身の上を述へしものならん明石の上の方にて御讀經あり紫の上より佛に花を奉らせ玉はんとて童八人を蝶鳥に仕立鳥には銀の瓶に櫻をさし蝶には金の瓶に山吹をさして贈り玉ふ胡蝶の卷に

鶯のうらゝかなる音に鳥の樂みはなやかに聞わたされて池の水鳥もろこはかとなく囀りわたるに急に成はつる程あかず面白し蝶はましてはかなきさまに飛たちて山吹のませのもとに咲こぼ

れたる花の蔭に舞出る云々

春

八橋檢校

春は梅ようぐひす　つゝじや藤に山吹
櫻かざすみや人は　花に心うつせり

（註）心うつせりは別して花を賞せるなり　みや人は多くは宮女のことにいへとも公卿殿上人などもかけて云へることあり

（解）春の眺めは梅に鶯すじや藤に山吹櫻なとてある其櫻の花を頭挿して遊ふ宮人は他事を打忘れ花に心を遷して樂しみ暮すとなり

（補）此歌は定家卿の歌に

春三月柳さくらに藤の花
うぐひす雉子ひばりなくなり

とあるものより作り出せしにや

都の花

讀人不知

上野の花に日暮や　あすは淺草飛鳥山
心ぐにむかふ島　春のあそびぞのどかなる

（註）上野、日暮、淺草、飛鳥山、向島みな東京の花の名所なり

（解）都人士か春の有樣を云はゞ今日は上野や日暮に終日花を眺め暮し明日は淺草或は飛鳥山また向島と思ひ〳〵に遊ひて歩るくか實に春は長閑なものてある

夏の部

郭公

倉橋檢校

月もるともにほとゝぎす　なきているさの山の端みれば

はやみじか夜もあけわたる

（註）入佐山は但馬にあり月の入るに山の名を掛けたるなり郭公か鳴てゐると云ふにも掛れり　みじか夜は夏なればいと夙く山の端よりしらみわたるを云ふ

（解）夏の短夜の曙に月は傾く時分只一聲の郭公と共に月は山の端にかくれ夜はあけわたるなり

（補）六條前太政大臣の歌に

ほとゝぎすなきて入さの山のはは　月もえよりもうらめしきかな

とある句をとれり

夏

慈鎮和尚

花橘も香ふなり　軒のあやめもかをるなり

夕ぐれさまのさみだれに　山時鳥なのりして

（註）花橘は橙柚の類　さみだれは入梅頃の雨

（解）花橘も匂ひ軒の菖蒲も香るゐれはゐも何時頃其樣になると云ふに夕暮れ方のしかも五月雨の降る頃てあるゐれのみならす郭公も啼くわいとなり

さみだれとは細雨降（ザアメダレ）の約言にて概して此頃の雨はこまかきか故に此稱あり

（補）古今和歌集讀人不知の歌に

さつきまつ花たちばなの香をかけば
昔の人の袖のかぞする

とある是等の意あるべし

花染衣

讀人不知

花染衣ぬぎかへて　卯の花かさねうちきつゝ
すゞしき月をまつの戸に　山ほとゝぎす音づるゝ

（註）花染衣は花の色香に觸れたる衣服にて　卯の花がさねは下に紅衣を着け上には白衣を重ねたるものなり　卯の花は色白なれは夏の衣を云ふなり　まつの戸は月を待つと松の戸とを掛けたり

（解）春櫻花の時節も過き去り卯の花の咲く夏となつて涼みかてらに端近く居て月の登るを待て居るにはからず時鳥か啼きたるうれしさよとなり

時鳥

足代弘訓

ほとゝぎすまつよひやみの　空をあはれとおもふまに
さみだれはるゝ雲間より　月もほのかにさしいでゝ

（註）ほのかは朦朧にて俗にいふほんのりなり

（解）嗚呼情ない空しや我か時鳥を待て居るにも係らす霄闇たと不平に思ひ居る中に五月雨も霽れて月がほんのりとさし登て我思を和らけるよとなり

水の宴

讀人不知

賢人の釣をたれしは　嚴陵瀨（ライ）の河の水
月影ながれもるなるは　山田の筧の水とかや

（註）賢人は東漢の嚴光のことなり　嚴陵瀨は嚴光の釣を垂れし處なり嚴光字は子陵なれは其性と字とを取て後世に名けしなり

筧は掛樋なり

（解）古賢人か釣を垂れた處は嚴陵瀨の河てあるか其水か清けれは月か好く映つり水と共に流れるやうに見え又月と共に洩るのは山田の掛樋の水とか云ふてとしやか如何にも玉か流れ玉か洩るやうて美しくあらうとなり

螢

足代弘訓

山かげくらき木がくれは　ほたるを道のしるべなり
やみに棹さす舟人は　川瀨のみをに迷ふらん
（註）こがくれは木の蔭なり　みをは水の深くよゞみたる所を云ふ

（解）山蔭の木の下は月の光かなきゆえ眞暗じやけれとも螢の光をしるへとして道をたどることとか出來得れども暗夜に舟を漕く人は道しるへとすへきものもなけれはさぞ川瀨の深き所に迷ひて方向を失ふてあらうよとなり

雲間月

清水濱臣

雲間の月もやどるなり　水鷄の聲もしきるなり
立花かをる夕風に　岩もる清水すゞしくて
（註）しきるは頻りにと云ふか如し
（解）橘の香か夕風に吹き送られて來る時分には水鷄の鳴く聲も頻に聞え岩洩る清水の涼しさうな所に雲間の月も宿りていと美しいてとてあるとなり

夏

八橋檢校

夏は卯の花たちばな　あやめはちすなてしこ
風ふけばすゞしくて　水に心うつせり

（註）水に心うつせりは水邊に納涼するなり

（解）夏に愛すへきものは楊櫨（ウノハナ）、花橘、菖蒲、蓮、罌粟等てある此時分には暑さに堪へ難けれは水邊に納涼するは好き樂みてある

（補）此歌は定家卿の歌に

夏三月卯つ木橘なでしこに
山ほとゝぎすくひな鵜のとり

とあるより作り出せしものなるべし

楢の小川

讀人不知

ならの小川の夕風に　しらゆふかゝるなみのおと
神の心をすゝしめの　みろぎぞ夏のしるしなる

（註）楢の小川は山城上加茂の末社楢の社の後を流る御手洗なり

しらゆふは白き木綿（ユフ）にて今のもめんには非す白和幣（ニギテ）とも云ふ

みそぎは河邊に出て身の穢を祓ひ禍を除くを云ふ六月晦日と十二月晦日と一年に兩度あれと歌には多く六月のをよめり故に夏越の祓とも云ふ　しるしは證なり　かゝるは白木綿と云ふよりなみのかゝると云ふに緣あり又涙を白木綿に見做したるにもあらん

（解）川風に波の音して神慮も清々しかるへく楢の葉なと打戰よき耳目に觸るゝものみな秋の心地はすれとも夏てあるとなり

（補）此歌は新勅撰、正三位家隆卿の歌に

風うよくならの小川のゆふぐれは
みそぎぞ夏のしるしなりける
と云へるより取れるなるべし

秋の部

秋

慈鎮和尚

あきの始になりぬれば　今年もなかばは過にけり
わがよふけゆく月かげの　かたぶく見るころあはれなれ

（註）わがよは吾世と秋の夜とを通はせしなり

（解）秋の初めに成て見れは今年も半分は過きてしまひ吾世も秋の夜と共にふけて行く其夜の月か山の端ちかく入るを見るにつけても己れの晩年になつて傾きかゝつた齢のほども思はれて實に物悲しい扨々秋の夜は物事にかゝしきものじや

（補）此歌は古歌に

秋はきぬ年も半はに過きぬとや

荻ふく風のおぞろかすちん

とある此等の意なり

あきつ　足代弘訓

あきつとびかふ草の葉に　秋のはつ風ふきそめて

入日のかげはてりながら　ゆふべすゞしくなりにけり

（註）あきつは蜻蛉なり、とびかふは互に飛びかはすなり

（解）夕日は暑いものじやに草葉に蜻蛉が飛びかはして秋風が吹くやうになれは假令入日がさしても夕方は大層涼しくなつたてれで秋になつたことが知れるとなり

しほり荻　黄瀬川龜鶴

伊勢の濱荻難波の蘆　鎌倉山や武藏野の草

草の名れはしと申せども　しほりをぎにしくものはさぶらはじ

（註）伊勢の濱荻難波の蘆共に全しものなり、難波は今の大坂。鎌倉山は相摸、武藏野は今の東京なり

（解）伊勢の濱荻や難波の蘆其他鎌倉山や武藏野の草の種類は多いと云ふことじやけれども枝折荻に及ふものはあらすとなり

明石　北島檢校

所から名にしおふ　明石の浦の秋の頃

月さえわたりよる波に　うつろふ影のおもしろや

（註）名にしおふのしはやすめ字にて名に負ふなり明石の浦は播磨にあり、さえわたりは澄み渡るなり、よる波は寄る波なり、うつろふは映るなり

（解）あかしと云ふことを名に負ふ故月の名所明石の浦の氣色にかけていへるなり時は秋にて其秋の夜の月影か澄み渡りて寄る（夜

に通ふ）波にうつる景色は實に愉快であるとなり

月

三橋檢校

葉月なかばの月すみて　ちらとぶ雁の聲おつる
しろたへごろもうつゝなる　ゆめのちぎりのあはれさよ

（註）葉月は八月なり聲おつるは雁の聲の耳に近く聞え來るなり
夢のちぎりは暫時の約束なり

（解）八月半は即ち十五夜頃にて所謂中秋明月の折なり空飛ぶ雁の清き音や衣を打つ砧の響きも聞ゆるか其砧を打つと云ふ語に緣ある現の夢の契と云ふものははかなきものじやとなり

都の月

藤原實定卿

古き都にきてみれば　あさぢが原とぞあれにける

月のひかりはくまなくて　秋風のみぞ身にはしむ

（註）古き都は山城の京なり、あさぢが原は茅芒などの茂れる原なりくまなくは一体に照り渡るなり

（解）古き都に來てみれは以前の繁昌に打變はりて草しげき野原となりて實になさけなき有樣となりしに月の光りは昔に變はらず一体に照り渡り秋風さむく身にしみて一層懷古の情を切ならしむることとなり

（補）此歌は藤原實定卿古郷の荒れたるを見てよみし歌にて正主の歌に

古さとのならの都をきてみれば
鹿の伏戸とあれにけるかな

等と其意一ならん

青海波

本居太平

舞の名におふ青うみの　なみ立出てながめする
聲のしらべも澄む月の　桂の殿にきこゆなり

（註）桂の殿は天上の殿にして月界をいへり

（解）舞の名に負ひて居る青海波といふ其波の立つ狀を立出て眺め居ると波の岸うつ音も澄み月も皓々として清くあるが此面白き波の音樂は月の世界にまでも聞ゆるてあらうとなり

月花

熊澤蕃山

雲のかゝるは月のため　風のちらすは花のため
雲と風とのありてこそ　月と花とは尊とけれ

（解）雲の月にかゝるのは全く月をして殊に人に賞さしめんか爲てある風の花を散らすも亦るれと全しことしや若し雲もなく風もなく月は常に皓々として有り花は常に爛熳として有らは常となりて珍らしきことはないされは時に雲ありて月を掩ひ風ありて花を散らすが故に月や花が尊とくなるのじやとなり

須磨

八橋檢校

すまの浦わに旅寢して　よすから月をぞ詠めける
こひしき人にはあはじ島　やま〳〵つもる思ひかな

（註）須磨は攝津にあり浦わは浦回にて海の入り込し處なり旅寢は旅宿なりよすがらは終夜あはじしまは遇はずにかけていへり

（解）須磨の浦に旅宿して夜じう月を眺めて居つたか實に好き月てあれはどうぞ戀しき友達と共に見て樂みたいと思ひて待ち居たれとも遂に遇ふことも出來なんだろれ故我思ひは山々積るよとなり

菊の露

齡久しき山人の　　讀人不知

うちはらい〳〵　をる袖にはふきくの露
千年の秋やたくるらん

（註）齡久しき山人は長壽の仙人なりをる袖にはふは菊花を摘つ香袖に止まるなり千年の秋は長き間をいふ菊は秋の花なれは其花の久しさにもよせて千年の秋と云へり

（解）壽命際限なき仙人は菊花を折りて花の香のうつれる袖の露を打拂ふと云ふ間も千代と云ふほどの永き年月てあらうとなり

（補）此歌は新古今和歌集中俊成卿の歌に

山人のをる袖にはふ菊のつゆ
打拂ふにも千代はへぬべし

と云へるより取れるなるへし

昔し南陽酈縣の某山の谷奥に仙人あり菊を植ゑて樂めり其菊の露谷川へ落ちしを下流のもの其水を飲みて皆な長壽を得しと云ふ故事あり

玉川　　三橋檢校

かはぞにつたふ松風の　　おとだに秋はさびしきに
衣うつきのかきもあれて　　きぬたもいとどいろぐなり

（註）玉川は攝津擣衣の玉川なり川ぞは川の迫りたる所又は支流の注入する所なぞに云へり衣うつぎは楊據と衣擣杵とを云ひかけしなりいろぐは砧のいろかしく音の聞えさてさびしさを增なり

（解）秋は川門に傳ふ松風の音さへ淋しさに況して卯つ木の籬も荒れ果て衣を擣つ砧の音もいろかしく聞ゑて一層哀をますとなり

（補）此歌は後拾遺相摸の歌に
見渡せば波のしがらみかけてけり
卯の花さける玉川のさと
とあるを取りて擣衣の歌に作れるならん

古調

讀人不知

うばらときの下には　鼬笛（イタチ）ふく猿かなづ
蚱蜢（イナゴ）まろは拍子うつ　蟋蟀は鉦鼓うつ

（註）うばらときは茨濃きにて茨の叢なり
（解）茨叢の下に虫獸のすだく有様を物に例へて云はゝ恰もいたちは笛吹き猿は琴を彈し蚱蜢は拍子となり蟋蟀は鉦鼓擊つ樣に聞えていとにぎやかであるとなり

水車

讀人不知

まくらにひゞく水車　夜ふくるゝまゝに音高し
しはしまどろむ夢のまも　枕にひゞく水車

（註）夜ふくるゝまゝは夜の更くるに隨ひてなり　まどろむは目蕩にて暫時眠るなり
（解）水車の枕に響く音は夜の更くるに隨ひて段々高く聞ゆるか暫らく眠つて夢の間も絶えす水車の音か枕に響くわい

清き心

讀人不知

きくに心のすむものは　荻の葉ろよぐ秋の暮
夜深き笛の音しやうの琴　荒れたる宿ふく松の風

（註）ろよくは戰の字を當てたり　ろよ〳〵と動くなり　しやうの琴は箏と云ふ琴なり
（解）聞くに心の清むものは秋の暮に荻の葉ろよく音や深更の頃

の笛の音や箏の音や荒れたる家の軒の松風の音などてあるとなり

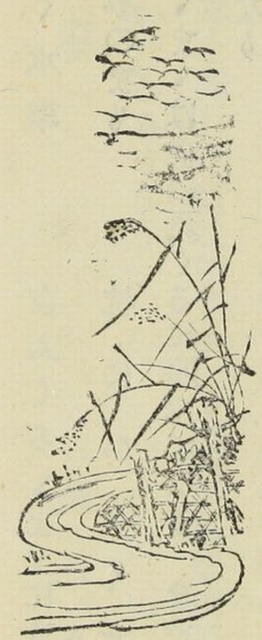
秋は紅葉

八橋檢校

秋はもみぢ鹿の音　千草の花に松虫
雁なきて夕くれの　月に心うつせり

（註）ちくさは種々の草なり

（解）秋の心を慰むるものは紅葉鹿の音千草の花松虫や雁の聲等てある何れも面白くあるか月は殊に金氣（アキ）の空ゆゑ殊に清光なれは他時の月に勝れたりとなり



冬の部

冬はしぐれ

八橋檢校

冬はしぐれはつ霜　あられみぞれとがらし
さえし夜のあけぼの　雪に心うつせり

（註）風は冬風なり、さえは寒きなり

（解）冬の眺めは時雨初霜雹霙など何も宜しいか風の冴えし夜の明方の雪は又別段のものであるとなり

（補）此歌は定家卿の歌に

冬三月千鳥鳴つれ殘菊に
枯野の落葉雪霜と聞く

とあるこれ等より作り出てしものなるへし

勢田の橋

讀人不知

にほの海づら見渡せば　たぐひなみ間に有明の
月影さえて白妙の　雪をかけたる勢田の橋

（註）にほの海は鴉の海にて近江の琵琶湖なり勢田の橋は此湖に架けたる橋なり　白妙は白さを云ふ　たぐひなみまは類なしと云ふに波間をかけたるなり　有明の月は滿月を過ぎて後は月の有りなから夜の明くる故に有明の月と云へり此處にては有りと云ふを有明とつゝけたるなり

（解）有明の月か河を渡りし折に湖水の面を見渡せは一面に白妙を敷けるかと見ゆる中に怪しくも白妙の雪もてかけたる橋の形か波の間に有りて其景色は實に無類てあるとなり

（補）此歌は新拾遺集惟賢の歌に

さゝなみやうち出てみれは白妙の
雪をかけたるせたの長はし

とあるよりとれり

冬

慈鎮和尚

冬の夜さむのあさはらけ　ちぎりし山路はゆきふかし
心のあとはつかねども　思やるてろあはれなれ

（註）ちぎりは契約なり　あはれはてゝにては哀情なり

（解）寒き夜の明け方におきてみれは兼て約束して置た山のあたりは雪が大層積つた故に身は行くてとが出來ぬ其あたりに心だけをやつて見る扨心は無形なれはあとはつかねとも此樣に思を運はすと云ふも亦朋友の情にてあはれなものしやとなり

（補）萬葉集に

夜をさむみ朝戸をひらき出てみれは
庭もまはらにみ雪つ・もれり

とある此等の意なり

園生の竹

足代弘訓

園生の竹の下をれの
音ぞをりくさてゆなる
ふるとしもなくふる雪の
いかに夜ふかくつもるらん

(註) ふるとしもなくは降る樣子もなきなり

(解) 今夜は雪の降る樣子もない樣たけれとも園生い竹の折れる音か時々聞ゆるか何程多く積るてあらうとなり

時雨

足代弘訓

しぐれくし神無月
おく霜月もすきにけり

師走は雪のさむけれは
埋火をのみとゝもとして

(註) 時雨は十月頃の雨を云ふ 神無月は十月霜月は十一月師走は十二月にて皆な舊暦に相當せるなり

(解) しぼくと時雨の降る神無月や草葉に霜おく霜月も過き去りて師走となれは雪も降りて寒き故爐の埋火ばかりを友として外出もせぬことよとなり

冬ごもり

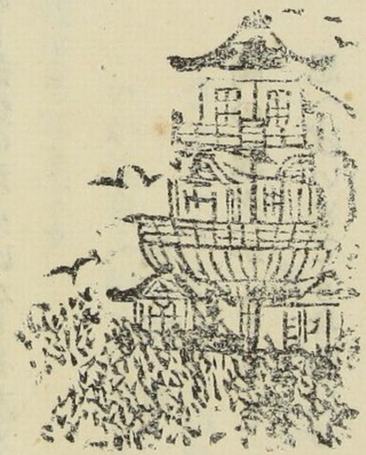
清水濱臣

冬ごもりせる雪の夜は
閨の埋火かきおこし
炭やくしづがなりはひを
思へばいとてろ身はひゆれ

(註) なりはひは家業なり、ひゆれは冷ゆるなり

(解) 冬籠をして居て雪の降る夜には閨の埋火をかきおこしあたり居るか此あたるにつけても炭をやく賤しきものゝ生活を思ひて

見れはあたり居る身さへ煖かさ心地はせぬよとなり



賀の部

君か齡

君が齡はさゞれいしの　いはほとなりてむすてけに
生る小松のかげふりて　鶴の巣ごもる代々までも

（註）さゞれ石は砂礫なりむすは生するなりかげふりは蔭が繁茂するなり

（解）君の御齡は礫か巖となりて其巖に苔か生ゑ其上に松が繁茂し其松の上に千年も長生する目出度き鶴か巣を結ふまても御存命のことてあらふとの意なり

讀人不知

（補）此歌は古今集讀人不知の歌に

君か代は千代に八千代にさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

とあるより取れり

三番叟

加納諸平

たちまふ袖につゝみても　なほあまりあるうれしさを
さやけき鈴の音にたてゝ　君が千とせの數うへん

（註）さやけきは分明なり

（解）舞衣の袖は長く大いなるものなれども我嬉しさは其袖にも包みきれぬ故はつきりと鈴の音にあらはして其音を君が千歳の數に增し加へやうよとなり

（補）此歌は古歌に

うれしさを昔は袖に包みけり　こよひは身にもあまりぬるかな

とあるこれ等の意なるへし

羽衣

讀人不知

君の惠みは久方の　あまのはごろもまれにきて
なでし巖はろのまゝに　動かぬ御代のためしかな

（註）久方は空雲天などゝ云ひ出さん爲めの枕詞なり、まれにきては稀に來るなり則ち三年に一度天女か天降ると云へるによりへたりなでしいはほは佛經に十里四方の大磐石を三年に一度天女か天下りて羽衣にて撫て盡くすを一小劫といふに據れるなり

（解）我大君の御惠は何時迄も長へに天女か三年に一度天下りて其羽衣を以て大磐石を撫て盡くしゝとは昔の事にて今や彼の天女の撫つると云ふ巖はろれてろ動きなき御代の驗しなれと御代の長久を祝せしなり

（補）此歌は續後拾遺讀人不知の歌に

君が代に天津乙女の行かよひ
なづるいはほの動きなきかな

とあるよりとれり

友千鳥

讀人不知

みちひたゐせぬしほの山　さしでの磯の友千鳥
君か御代をば幾千代と　聲もゆたかになきかはす

（註）みちひたえせぬは鹽の山と云はんための序詞なり鹽の山指出の磯も共に甲斐にあり千鳥は群れたる千鳥を云ふゆたかは君を祝する意なりかはすは交ふるなり

（解）我大君の知召國の長久を祝して鹽の山指出の磯に居る多くの千鳥か聲も豊かに鳴き交はすとなり

（補）此歌は今古集讀人不知の歌に

しほの山さしでの磯の友千鳥
君か御代をば八千代とぞなく

とあるよりとれり

八千代

讀人不知

おなじことといふ老か身を　をかしと人はいふめれど
君は千代ませ八千代ませ　君は千代ませ八千代ませ

（註）ませは在らせられよなり

（解）仝し事を繰り返し言ふ此老人を他人はさぞ可笑と笑ふてわらはれとも吾は君の萬歳を祈りて君は千代ませ八千代ませ君は千代ませ八千代ませと云ふとなり

（補）此歌は拾遺集源順の歌に

おいぬればおなしことところせられけれ
君は千代ませきみは千代ませ
とあるを取れるなり

群鶴

つるのむれ居る松山に　千代に八千代を重ねつゝ
よはひは君が爲めなれや　天の下ところのどかなれ

（註）松山は備中にあれともこゝは何處にても鶴の群れ居る松山のことゝすへしのどかは無事なるなり

（解）鶴も松も千年の壽を保つものてあれは鶴の群かり居る松山には鶴と松とて千代は千代の壽を重ねて居るそれは全く君の爲めと見える夫故に世の中か斯く無事なのてあらうとなり

讀人不知

祝言

君を初てみるときは　千代も經ぬへし姫小松
御前の池なる龜か岡に　鶴ところ群れ居て遊ふなれ

（註）姫小松は小松なり龜か岡は池中の築山なり

（解）君に初めて遇ひて御樣子を見上るに春秋に富める小松のやうで千年萬年も長生なさるゝ樣に見えますろれゆゑに庭前の池中の築山には鶴か群れて遊ふてありませうとなり

佛御前

萬歳

君は萬歳ましませは　我等もみ蔭にさふらはむ
鶴と龜との齡には　さいはひ心にまかせたり

（註）御蔭にさふらはむは御蔭を崇むりませうとなり鶴龜との齡

全人

は千萬年の齡なりさいはひ心にまかせたりは幸福の意の儘に得らるゝよとなり

（解）君は萬歳も御存命てあらせられよされは我々も永く君の御恩澤を蒙りませう君か千萬年の長生をなさつたならは我等か幸福は意の儘に得らるゝとてありませうとなり

蓬萊山

岐王

蓬萊山には千とせふる　萬歳千秋かさなれり
松の枝にはつるすくひ　いはほの上には龜あろぶ

（註）蓬萊山は神仙の住む山なり往古泰人我邦の風土を賞して斯く云ひしとなり

（解）蓬萊山は神仙の住む山とて其山には千年も經る松樹あり其松には千年も生きる鶴が巣を結び又萬代も動かぬ巖の上には萬年も長生する龜か遊んて居ると云ふが其目出度さは實に千秋萬歳を重ねて居るよとなり

相生

讀人不知

萬代かけて相生の松　松と竹とのふかみぞり
かはらぬ色はもろともに　老せぬちぎりなるべし

（註）かけては迄もと云ふに同し相生は併ひ生ふるなりふかみぞりは青みの深きを云ふ

（解）萬代までも夫婦相生のかたらひ諸共に老衰せぬと云契約良縁てあらうとなり

（補）此歌は續後撰素性法師の歌に

うゑてみる松と竹とは君が代に
千年ゆきかふ色もかはらじ

とあるより取れるならん

愛之部

小野のすまる　三橋檢校

をの丶すまゐのおのづからきこえやありとつ丶ましく
みねのおらしやさをしかの聲にもたてずなりにけり

（註）小野は山城比叡山の麓にありきこえやありとは返答がある
かとなりつ丶ましくはひつろりなりさをしかは牡鹿なりこ丶にて
は音にもたてずと云ふ序に用ひたり

（解）浮舟小野の里に忍び居らるゝと聞て薫中將和歌を給りたれ
ども何事の返しもなかりしとなり

（補）此歌は薫中將宇治の姫君を小野に尋ねられしを述べしもの
なり

宮の鶯

同　人

みやのうぐひす花になき　軒のつばめはあめをよぶ
羨やましきはれのが身を　心のまゝにまかすらん

（註）宮は上陽宮なり

（解）鶯燕は花に戯れ雨をよぶ心の儘の樂みもあらん然るに我は上陽宮に移され君の御顧みもなければ彼の鳥の身の自由なるが羨ましとなり

（補）此歌は唐の玄宗皇帝寵愛衰えたる美人を殘らず上陽宮に移し獨り楊貴妃を愛して華清殿に居玉ふを寵衰へし人の羨む情を陳へしなり新續古今爲忠朝臣の歌に

いたづらにむろぢの春も過になり
みやのうぐひす聲ばかりして

とあるこれらの意をとれるならん

琴の曲

讀人不知

峰のあらしか松風か　尋ぬる君の琴の音か
駒をとゞめて聞からに　つまおとしるき想夫戀

（註）つまおとしるきは著きなり想夫戀は琴の曲名なり

（解）あれあの音のするは峰の嵐の音か松を吹く風の音かたゞはまた我尋ぬる所の人か琴をひく音であるかと思ひて駒の足を止めて聞く程に琴の音か段々著く聞ゆるかあの曲は想夫戀と云ふ曲であるされは我尋ぬる所の人が想夫戀を彈て居るのであらうとなり

（補）此歌は源平盛衰記に高倉院櫻町中納言重範卿の女小督殿を

深く愛せられしに平相國中宮の御爲に妨になりもやせんと思ひて亡はんとしたりしを小督洩し聞きて夜縞に禁中を忍ひ出てゝ嵯峨の邊に身を潜められけるに主上此由を聞し召され折節八月十五夜のとなりけるか譯正忠仲國をして尋ね來るへき旨勅し玉ひけれは仲國勅を奉し嘗て局の爪音に聞覺えあるを賴みに嵯峨の邊を幾回となく打ち巡り汀れとも音も聞えねは如何はせんと心を苦しめけるに法輪は程近汀れはろれに參り玉へるかと思ひ其處に向ひて歩ませけるに龜山のあたり近く松の一叢ある方に幽に琴の音聞ゑたり

峰の嵐か松風か尋ぬる君の琴の音かとたほつかなく思ひ駒を早めて行く程に片折戸の内に琴をろ引澄ましたる手綱をゆらえて聞けれは少しも違ふへくもなき小督殿の爪音なり樂は何ろと聞けるに

想夫戀と云ふ樂なり仲國急き馬より下り門を叩き内に入りて御書を渡しゝ云々とあるを歌に作れるなり

こゝろ　讀人不知

心の中には忍べとも　色には出てけり我戀は
物や思ふとみる人の　あやめていかにと問ふまでに

（註）色に出てけりは外貌に顯はるゝなりあやめては怪しむなり

（解）我戀を人に知らすまいと思ひて心の中にては十分忍ひて居るから人は知るまいと思の外見る人かどうしたのである何にか心の中に物思ひをして居るかと怪んて問ふまてに外貌に顯はれたされは心の中のとは隱されぬものしやわいとなり

（補）此歌は拾遺集平兼盛の歌に

忍ぶれど色に出にけり我戀は

物や思ふと人の問ふまで

とあるより取れり

靜

海野遊翁

賤の苧環くりかへし　昔を今とうたひけむ

其世のさまは知らねども　おもひやるこころあはれなれ

（註）賤の苧環は苧をうづ巻きたるへうと云ふものなりはてしなくくりかへしまきかへすものなれは苦しき思ひにかけて云ふなり

其世は其時なり

（解）昔義經の妾靜か鎌倉に送られて舞を命ぜられたとき靜の歌に

しづやしづ賤の苧環くりかへし

昔を今になすよしもがな

と謠つた其時靜の身の上のことは知らないけれども推量して見れは實に憫なるとてあるとなり

白菊

藤原敦兼

ませのうちなる白菊も　うつろふ見るこそあはれなれ

われらが通ひて見し人も　かくしつゝころかれにしか

（註）ませは籬なり、うつろふは色のかはりゆくを云ふかくしつゝは斯の如くになりかれにしは遠かりしなり

（解）籬の中にある白菊の散りかゝるを見るは實に哀れなものしやか我等か行き來をした所の人も菊花の色の變るか如くいつとなしに遠さかる樣になつたのであらうかとなり

（補）婦人養草八の巻に云ふ刑部卿敦兼はみめの世にすぐれて惡げなる人なりけり其北の方は花やかなる人なりけるか五節を見侍

りけるにとりぐ〳〵に花やかなる人々の有様を見るにつけ先つ我男のわろさを心うく覺えけり家に歸りてすへて物をたにもいはず目をも見合す打ろばむさてあれは暫しは何事の出來たるぞやと心も得す思ひ居たるに次第に厭ひまさりて片腹痛き程なりさき〳〵の樣に一所にも居す方をかへて住み侍りけりある日刑部卿出仕して夜に入り歸りたりけるに出居に火をもともさす裝束は脱きたれともたゝむ人もなかりけり女房とも皆御前のまびきに隨ひてさし出る人もなかりけれは詮方なくて車寄の妻戸を打明て獨ながめ居たるに更闌夜靜にて月の光り風の音物ごとに身にしみわたりて人のうらめしさも取添へて覺えけるまゝに心をすまして筆策を取出て時の音にとりすまして前の唱歌を繰り返し歌ひけるを此の方聞て心はやう直りにけりこれより殊に中めでたくなりし云々

吉野山

本居宣長

よしの丶山に入にける　人は行くへも白雪に
戀しき人をしたひても　いづこをはかと尋ねまし

（註）白雪は知れぬと云ふにかけたりはかは度にて方角といふか如し

（解）吉野山の奥へ入りし人は何處へ行つたか其人の蹈み行きし道も白雪の爲に埋もれてしまつたされば我戀しき人を尋ねるには何れを居る方と尋ねる方も知れぬとなり

（補）此歌は靜か義經に吉野山に別れしを慕ふ情を述べしものにして靜の歌に

吉野山みねの白雪ふみわけて
入にし人のあとぞこひしき

とあるをとれるならん

寝覚のまど

ねざめの窓の小夜あらし
契りし人はかれにしを

手枕

我等かあげこし手枕の
なにしにひまなくむつれけむ

別れ

ありのすゝみのにくきだに
あかではなれし面影を

本居内遠

うつはしぐれかもみぢ葉か
なにいま更におとづれむ

侍従大納言

たゐてひさしくなりにけり
ながらへもせぬものゆゑに

静

ありきのあとは戀しきに
いつの世にかは忘るべき

別れの殊にかなしきは
すぐれてげに戀しきは

親のわかれ子のわかれ
夫妻のわかれなりけり

地史の部

門司の關

硯の海は前にあり
たがかけりとは知ねども

明石

幾夜あかしのうらの波
あはれを思ふ折からに

甲斐

甲斐におかしき山の名は
むろぶしかしはや山

平野國臣

筆立山はうしろなり
昔の文字のせきのあと

北島檢校

よせてはかへし浮しづみ
あはれをろへてなく千鳥

讀人不知

白根波さきしほの山
薦の茂れるねはまやま

宇沿

木の芽はる風よりも
此山川をいか一なれば

東京

むかし男のろのかみに
ふちせひさしく流れきて

涙花

出る百船いさ千船
かまど賑ふみたとこて

都の春

近藤芳樹

長閑に吹きておもしろき
世に宇治とし名づけけん

仝人

誰がかゝる名を呼ろめし
今ぞ眞の都鳥

仝人

高津の宮のむかしより
楫の音せぬひまもなし

讀人不知

いつしか昔の國ぶりに
都の春の花をしも

むかし男

むかし男と身はなりて
春やむかしの春ならぬ

吊魂

討死なしゝまするをの
小倉の城を落しつゝ

返してこゝはすめらぎの
かざして遊ぶ日はあらめ

本居宣長

のこる言葉の花はなは
とばかり今日も香ふなり

高杉晋作

たまのゆくへをたづぬれば
我國廣くなしにけり

長居後攝津にあり

雜の部

鶴

長居の浦や春の日の
雛をもつれて遊ぶなる

兵子歌

肥後のかつをが來たならば
ろれても聞ずに來たならば

酒德頌

劉伯倫や李太白
更科越路の月雪も

三橋檢校

あしの若葉のやはらかに
鶴のけしきぞはてらしき

新納武藏守

えんしよ肴でだごをうろう
首に刀に引出もの

龜田鵬齋

酒をのまねばたゞの人
酒がなければたゞの處

みよし野

よしの丶山も泊瀬(オハツセ)も
曾我兄弟も十石も

武夫

すめら御國のもの丶ふは
たゞ身にもてる眞心を

胡蝶

宿のまがきのあさ顔の
あはれ胡蝶のあさいして

神祇

二川某

花がさかねばたゞの山
かたぎうたねば只の人

加藤司書

いかなることをかつとむべき
君と親とにつくすまで

讀人不知

露のけぬるをまちがほに
たが身となれる夢やみる

足代弘訓

かなたの社の宮居には
あけの鳥居のかみさびて

丸木橋

うれしやこしの山かげの
花みる人のためにとて

柴の戸

よのうきことはのがれすむ
あらしの音の身にしみて

長壽樂

人はとがむととがめじ
いかなる神のをすやらん
木の間に千木(チギ)も見えにけり

讀人不知

谷の小川の丸木橋
いかなるおぢがわたせにし

本居宣長

柴のあみどにさすがまた
都こひしき山のおく

熊澤蕃山

人はいかれどいからじ

いかりとよくとを捨てこそ

景清

かげといふも月のゐん
かげきよき名のみにて

熊野

熊野の權現は
和歌の浦にしましまさば

水の宴

水の勝れておぼゆるは
昆明池の水の色

常に心のやすけれ

近松門左衛門

きよしといふも月の縁
うつせゞ袖にやどらぬ

讀人不知

名草の濱にゞおりたまふ
年は行けゞも若王子

讀人不知

西天笠の白鷺池
行末ひさしくすむとかや

決心

人は死ぬとき死なざれば
世のことわざもようならず

山家鳥

世ばなれてすむ山かげの
軒のこずゑにゐる鳩の

孝子

つくしのやすの彌次郎は
牛馬までもむちうたず

狛の渡

讀人不知

死ぬるにまさる恥ありと
せまる我身を如何にせむ

足代弘訓

庵はとひくる人もなし
友よぶ聲を友にして

讀人不知

親に孝行つくしけり
三反三畝を作りゞり

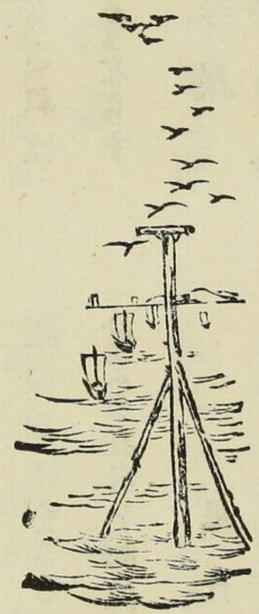
讀人不知

狛の渡は大和にあり

狛の渡のうりつくり
守る夜あまたになりぬれば

心がら

植てみよかし芳野の櫻
花のさかざる



うりを人にとられじと
瓜を枕についねだり

岡の少將

心からこういやしけれ
里はあらじな

愛涯百首

梅鶯

鶯さなけやはや來なけ
まろでに香るや梅の花

笑ぞろめたる宿の梅
小枝を手折りてかざしてん

若菜

雪消にかすむ野邊みれば
かたみにつめる初若菜

若草もえてみどりなり
母にささげん家土産に

學の庭

友達さろひはやゆかん
學の庭の敎へ草

學びの時はれくれまじ
ろいことの葉はろむくまじ

璞玉

琢け〳〵あらたまを
勵め〳〵學問を

雀の子

軒近く來て遊ぶ
親鳥の餌をあさる

惠の歌

天つゆの惠に花は開く
春の遊び

やがて いづるろの光り
いかにろはる身の光り

雀の子 可愛ゆし
はぐゝむもいぢらし

父母の惠に子等はろたつ

春の山邊にうちむれて
おもふどち
春の海邊にうちもれて
おもふどち

若葉

若葉の上吹く風香るなり
若葉の木蔭を今朝過ぎ行ば

我國は

我國は神國ぞ
治まれる明治の代

櫻がりせん袂つらねて
潮干がりせんもすろかゝげて

散にし名殘の花もゆかし
初時鳥なく音もゆかし

神の惠みわするなよ
御代のめぐみわするなよ

園の遊

柳の小枝はこかせに靡き
童は手折りて乙女は挿す
眞萩の花さく頃にしなれば
赤ものすろをばかゝげて遊ぶ

春は櫻

春は櫻香に匂ふ
名をばあげよ身を立てゝ

螢

玉だれゆらぐかげみえて
梅ケ枝香ひてまろでに香る
白露むずびて袂をぬらし
人は健男名を揚よ
君の御爲國のため
軒端冷しく飛ぶ螢

螢あつめて文よみし

師の恩

學の海の師の教
學の窓にむつみにし

明ゆく空

明ゆくみろらは長閑に霽て
門並みたてたる旭のみはた

新年

新年いはへ君が代を
君か代いはへ松風も
古人ぞしたはしき
深きめぐみをわすれめや
友のまじはり忘れめや
天の戸いづる朝日めづらし
治まる御代の風にぞなびく
諸聲にいざ〳〵うたはん
千代よばふ聲のゆたけさ

凧

あがるく凧あがる
我らもたかく名をあげん
技をならす風もなし
つかんくやり羽子を

書初

今日うかきぞめの
筆とりて文字かゝん
今日そよみぞめの
千代のかずよみうめん

勸學の歌

明日ありとぞおもふなよ
今日の日はまたとこず
今日の日はまたとこず
學ぶべしつとむべし

富士

仰くも尊し富士の姿
仰ぐもまばゆし富士の高ね
御國を鎮めて動きはなし
白妙の雪は千代もきえず

鹽釜

鹽釜の浦なびくけふり
鹽釜の浦こぎゆくおぶね
其名は都にたちてそのぼる
見る目も飽なく浦めづらしや

今こそ秋

垣根の玉萩はやさきろめぬ
白露おきろふ玉萩あはれ
野づちになまめき咲く女郎花
匂ぞこぼるゝ姿やあはれ
今ころ秋なれ小枝もたわに
今ころ秋なれ野風になびき

こんぼ

夕日の照る野に飛かふ秋津　友うちむれて追ひゆくたのし
川邊にすゞしく飛ふか螢　友うちむれてかりゆくたのし

胡蝶

菜のはにとまれる可愛き胡蝶　ゆきかひあろべよ
小池にひろめるかわゆき金魚　ひれふれふをはめ

競走

はしれ〳〵つまづかず　ますぐにはしれたふれずに
とれよ〳〵めざすはた　とりてどかへれあかき旗

園生の竹

園生の竹の一ト節ありて　直き姿ならはんわれも
軒端に松の雪霜ふれど　變らぬ色にならはん我も

紅葉

遠山の端に夕日の光り　照りろふ紅葉春邊の花に
だにまされりな　桂の花のごとくにすみて
月すむろちに散りかふ紅葉
ながめぞあかぬ

秋野の虫

秋野の鈴虫いざきかん　なく聲さやかにリンリンリン
いさまし勇し虫のなく音　とはでも知りなんくつわの虫

秋の田

見渡すかぎりは秋の田のも
年あるしるしぞ秋の田のも

稲妻かゞやくつゆの稲葉
鎌さへをもげにかるや垂穂

殘菊

竹の籬にさきぞのこる
霜にもあせぬ色いつくし

菊こそ御代にながくかはれ
菊こそ御代をながくいのれ

千里につゞく

千里につゞく鉄のみち
國てふくにはみな電(イナヅマ)の

ひらけゆくなる驗(シルシ)ぞ御代の
光り間にもたよりやかよふ

夜ひるわかず

夜ひるわかずめぐりて止まぬ
たがひじわれも
善あしかくさずしるくぞてらず
みがゝんわれも

時計にならひて學びの時を
鏡にならひて心のくもり

夜嵐すさび

夜あらしすさび寒き御山
秋の夜ながを月とゝもに

妻戀ひてなくおじかあはれ
鳴あかすらんおじかあはれ

あらし

木の葉を降りませ夜半の時雨
寢覺ぞわびしき冬の山家

聞くこそつらけれ(ハラハラハラト)
嵐の吹くこゑ木の葉のみ

白雪

白雪つもり玉ときよし
白雪つもりげにもふかし

雪まろはさん友よきたれ
山つきなさん友よきたれ

籠の小鳥

自由に飛びえぬかごの小鳥
河風さゐゆく小夜の千鳥

外もをながめてなくねあはれ
友呼びまよひてなくねあはれ

今やいづこ

あはれすみれを摘みしは昨日
あはれ竹馬のりしは昨日

ろの友戀し今やいづこ
ろの友戀し今やいづこ

盛りは今日か

盛りは今日か飛鳥の山に
しきなみきよく隅田の川に

大内山

波たゝぬ大内山の池水に
君が代は御池の波に影みゐて

袖をつらねて花見に行かん
小舟を浮けて月見に行かん

すゝき尾花

すゝき尾花生ひ茂りにし
めぐみの露に民草なべて
かゝる御代に生れし我等
君のめぐみ報いん人に

のどけき御代の姿をぞみる
うつる旭も動かざりけり

武藏野も今こそ御代の
うるほひにけれめでたゝ
なりはひつとめ家國とまし
やがてならんはげめ〳〵

獨り黄泉

ひとりよみぢの旅のいもと
誰か手を引かん哀れ悲し
木梢のあらし花は散りぬ
歸らぬいもとあはれはか那

廻れ〳〵

まはれ〳〵風車
やまずまはれ此かせの
ふくうちは吹くうちは
絶えずまはれこの水の
まはれ〳〵水車
たえぬまはたえぬまは

百鳥

もゝとりうたひ谷水笑ふ
花咲く春はげにおもしろしや

たんぽゝなづな嫁菜につくし
草摘むのべはげに面白や

窓に日

窓に日ははやいづ
軒にすゝめちよ〳〵
おとゝひよ起きいで
文をよみとくとく〳〵

坂道おひゆく

坂道おひゆく小車しばし
心をゆるせば後へぞもどる
我等がふみゆく學の道も
怠るときには初にかへる

月のかげ

さ霧も雲もやがてはれて
照すや月の影さよし
澄にぞすめる君か御代や
輝き渡る國の光り

御幸

今日は帝の目出度御幸
君が代歌ひ迎へやおがめ
今日はみかどの目出度御幸
道うちきよめ迎へやおがめ

時鳥

はつほとゝぎす鳴ゆく空は
すげがさかふりかたみに歌ひ

白雪

白ゆきふれば野邊もやまも
雪の上野の博覽會に
忍が岡の馬のりくらべ
さみだれはれて影さすあさひ
賤の女しづ男早苗ぞうゝる
道ころたゆれかれし木々は

春をもまたで花は咲きぬ
いざなふまにも消やすると
げに面白の雪のけしき

栗

藁鞋はきしめいざとくゆけ〳〵
落葉を蹈分けてのもにかのもに

柳蔭

柳の蔭に清水すゞし
野邊にはやし木蔭すゞし

橘

我れ友なしに出てくれば
笹栗えまひてなれらをまつる
きろひてたけかる秋山たのし
いざ立寄て結びあげましや
木傳ふ鳥の歌たのし

軒の橘袖にかはり
庭のなでしこ花の咲きぬ

鳥

はぐゝみなす鳥もあり
鳩に三枝の禮をろなふ

早蕨

山邊のさわらび拳(コブシ)をあげぬ
川邊のやまぶきみだれては

月

心にかゝる雲霧はれて
出る月の影のさやけさ

昔の人のゆかしいま
おもへばふかしつゆのめぐみ

汝れらも孝行わすれなせろ
汝れらも禮義をわすれなせろ

やがてはる風の咲ぞおかしき
波にもゆらげる姿やさし

かたぶく月の山の端にげて

新年

軒毎たつる旭の御旗
年立つ今朝は空さへ長閑

菊の花

色香目出度菊の花
幾代にほふ國の花や
夏なほさむき倭太刀や
魄きゆる秋の霜や

旭の御旗

いれずもあらなん倦ぬながめに
今日ころ祝へ今年のはじめ
今日ころあろべ兄弟妹
これぞ帝の御旗のしるし
四方のえみしらたゞみるからに

旭の御旗御國のしるし　汚すなまもれつわものどもよ
筒音ろろへ敵をばはらへ　御國のたてのつわものどもよ
豊さかのぼる旭の御旗　御國のしるし汚すなまもれ

菊

山路に菊はおくれて咲きぬ　霜にもかれず色をもかへず
まかきの菊の咲きろふ姿　一枝たをりかざしにさゝん

秋色

野邊には千草の花咲き亂れ　山邊は紅葉に色つきろめぬ
見倦ぬなかめの秋のけしき　尾上に妻戀ふ鹿またあはれ
月さえわたりて虫の音清し

心をすますか我か世の秋は

春色

彌生の空ろのどかに見ゆれ　野邊さへ山さへ花咲き亂れ雪さもまがふ
園生におひたつ若木の梅も　春吹く風に三ッ四ッ五ッ花咲きろめぬ

冬家

埋火かこひ今宵もきかん　寒さもわすゝ樂しきはなし
昨夜のつゞき正成いかに　父にや請ふて今宵もきかん

まいまいつむり

つのだせやりだせまいまいつむり　汝か身の家は背におふ貝よ
うづまく貝よ

心のまに〳〵かきをばつたふ

時計

時計を見よや夜晝分かず
時計は時をつくるがつとめ

梅の小枝

梅の小枝鶯きなく
清きながれ蛙はなけり

軍歌

勇ましともいさましや
角をば隔さずしづかにはひて
こゝまで來れ
休まずめぐり時をばつげぬ
我らもまけず學の道に
春をつくる聲きよし
春はのどが心地よし
筒音たかき軍の場に

いな〳〵荒駒ひらめく太刀
進みにすゝめ
靡きて見る敵の旗
此折はづさずうて〳〵
敵兵はしる

駒

荒野のまきのあら駒は
もゆる若草ふみしたき
あられたばしるしのはらの
やなみつくろひゝくゆみも
御國を守る
健夫らはかへりみなく
烟をかし疾く〳〵進め
百雷のとゞろく聲

人もなびかぬ糸遊の
友よぶ聲ぞ勇ましや
かりばのをのにますらをが
たばむばかりのあさあちし

御國を守る人となるを
たのまんや
忠義も勇も一とすぢなる
誠のみ
いきほひあらく寄せくる波を
たはいわの
かへすがごとし動きなせろ
人とこゝろ

開校式

今日あらたまの年を迎へて
開きぞそむる敎の庭
あやにかしこき大御影
君か代うたひていざ拜まん
開ぞゝむる敎の庭
師も友達もおしなべて
すぐれたまへるろの御姿
君が代うたひていざ祝はん

梅

雪の中に香ふや梅の
雪の上に照すや月の
いとも清きあはれ心もかくぞ
いとも清きあはれ心もかくぞ

卒業式

四年のさなび今日れへて
撫てぞ敎へ給ひにし
目出度き場(ニハ)につらなるも
我師の惠海ふかし
れもへば過ぎし四年さき
一と文字だにも知らざりし
我手をとりて敎へにし
深きめくみをわすれめや

軍歌

命をなにかをしまん
われころますらを
たゞこのなころをしけれ
死ね〳〵君のため
屍は野邊にくつとも
名はなどくちもすつべき

たゞこの赤き心を　見せなん國のため

月

御空の月はいとすみわたり　野もせのすゝき打靡くまで
しらべたへなるろの笛たけの　こゑころよゝにひゞきけれ
葦原ふかく籠りし仇　打取りしいさをしこころは
列をばみだりとふかりがねの　聲より高くきこえけれ

進撃

（見渡せばの曲　譜を用うべし）　鳥居炊

見渡せばくづれかゝる　敵の大軍心地よや
もはやたゝかひ勝なるぞ　いでや人々追ひくづせ
銃劍つけてつきたふせ　敵の大軍つきくづせ

すはや戰ひはじまるぞ　いでや人々せめくづせ
彈丸をめて擊ちたをせ　敵の大軍うちくづせ

君か御代

六百年の昔より武家に移りし兵權を
天下の政事ものこりなく一時に歸する君か御代
盡せやつくせ君のため祝ひやいはへ君が御代
士農工商さまゞに品ころかはれ大君に
盡す心しかはらずば國のかためとなりぬべし
つくせやつくせ君の爲め祝へやいはへ君か御代
千百萬の兵船を海に浮べて寄せ來とも

大和心しかはらずばあだもかたきも恐れめや

つくせやつくせ君の爲め祝へやいはへ君か御代

國は日の本日の光りいたらんきはみ大君よ

君は萬世一系の我大君ぞしろしめす

つくせやつくせ君のため祝へや祝へ君か御代

繪畫

落合直文

山には花のさゝ亂れ

水には月のかけうかふ

風しふきなばろの花の

かはりやすらむ散りやせむ

波したちなばろの影の

くだけやすらむ消えやせむ

御空をかけるろの鳥は

何處をさしてゆくならむ

葉末の虫の聲せぬは

夕をまちて名のるらむ

あなおもしろのこのかたや

いかなる人は畫きけん

形ころあれこゝろまで

形ころあれこゝろまで

戀しき母

大和田建樹

春は我宿にまたもかへらず　夢は我宿に又も來らず

戀しき我母影はなほこゝに　戀しき我母聲は猶あれに
籠の鶯も今朝はうたはず　窓の春風も今朝はさゝはず
戀しき我母夢かゝの影は　母なき此身は夢かあの聲は

江夏嵐

上の巻

氷玉散史

すゞみの船のあとたえて　つきかげ清きかい原を
波間の煙りうちなびき　から歌謠ひうかれつゝ
姿たけしきものゝふの　夏をよろなる世界よと
ひるをあざむく月影に　立ちも得やらず暫くは
袂ふかせつたゞひとり
松の木蔭に身をよせて

すゞめる程に暇もなく　空に聞ゆるかさゝぎの
さよ風寒く身にしみて　あまのいさり火影消えぬ
鳴く音寂しく更け渡り

今はと立ちてものゝふは
ふた足三足ふみゆけば　待ち設けけん早くより
二人の若武者太刀拔て　あらはれ出でぬ忽ちに

勢ひたけくものゝふの　あはれめづらし鐵の進
まへに後にふさがりて　遁しはせじと叫ぶなり
父のあだなるすぎ山よ

思ひ廻せばはやとゝせ
ふたゝび歸らぬ年月の　いく田の森のした露に

汝がやみ討にわが父は
　年まだ若き身ながらに
われ等はらから其時の
積る怨に堪へかねて
　夜も日も分かす野に山に
ながれ住家を尋ねしに
めぐり合てはまた更に
　今は遁さんいかでやは
空にも飛べよ羽あらば
我か燒太刀の折るゝ迄
　のゝしる眼も血走りて

消え給ひけりはかなくも
　ふかき恐にしのび得ず
暇なく武藝に身を挫き
　思ふに任せぬ憂世とて
捕り遁しゝもいく度ぞ
　地にもくゞれよ爪あらば
今は遁さんいかでやは

勝負〳〵とはらからが
きしうつ波のおと高く
　太刀風寒くつめよれば
つき影すゞし松が枝に

下の卷

ものゝふ聞くより打笑ひ
あなをこなれや夏の虫
投ぐるがごとき兄弟の
　さはらば折れん腰の太刀
よらばくだけん劍太刀
くび討ちくれん兄弟と
　言葉をはらぬろの前に
みぎ左よりはらからが
　我とわが身を火の中に
鈍き刀金のあはれさよ
　いでやきたひし我腕に
嘲ける聲もいとにくし
　を叫び强く斬り入れば

からだひねりつ武士は
上段下段いなづまの
きらめく如きはや業に
ヤツと受たる邊りには
武士イラツテせい眼に
たゞ一突と突きくるを
拂ふやいばの風の音に
斬られていかる武士は
ます〳〵荒るる狂ひ猪
くるま返しにひと討と
篠木を削るたゝかひの

居合ながらに拔き合す
エイと討くる太刀先を
火花散るなり絶間なく
ヒラリと開く小手返し
サツト飛散る鮮血しは
体を潜めてはらからを
こゑする方にまた火花

を止も見えぬさ夜中に
月はかくれつくろ雲に
なみれと荒きかは原に
つきの光の消えぬれば
見えてろわたれ飛ぶ螢
ひまを窺ひものゝふは
暗を便りに太刀ふくみ
つゝいて飛びぬ兄弟も
風はいつしか治まりて
雲もをちこち霽れ行ば
冲の岩かげ見えかくれ

あらし俄に吹きいまき
雨さへ降來ぬ音たてゝ
木の下がくれ草のうへ
三つ四つ五つ七つ八つ
ザンブと波に飛び入れば
跡だに見えずわだ中に
すゝしくすめる日の影に
くひなゝくなり友呼て

難破船

百二十

磯貝由太郎

むらくも迷ふやみのうら
ゆくへも分かぬわだの原
燈臺のとぼきひかりぞ
きらめくほしの影すごし
あらぶるなみの音たかし
たつきなりける

（水夫甲）
こゝろもとなやよべの夢
水夫（カコ）のわざころあやふけれ
このあたりみなとに船を
つなぎてんや

（水夫乙）
くろき大蛇（オロチ）と見えけるが
ふたりの夢のたかはぬは
ゆめは逆にも云ふなるを
いろぎてんともいはましを
なりにけるかな

（船長）
さは愚なる格言（カコト）かな
汝等をまつらん妻子等は
さらにもとめんよしもなし
この船路はや二日とも
あらき波路をいろくなり
船子の身こうせひなけれ
ひゝきなだに
船長（テサ）のことばにしたがひて
さらに加はるなみのおと
さしかゝる音にきこえし
夜ふかきあらしふくからに

水泡（ミナヘ）に似たるひとの生命（イノチ）
こよひはことに波あらし
繫ぎてんや
われらの船を食みにけり
さても希有なる不思儀なり

現世(コノヨ)ながらの地獄(ヨミ)のみち
ひかりなり暗路はなべて

(船長)ともし火見えぬ船來(ク)らし
山より高くよる波に
ふなびとらろれといふ間も

波のみねよりおちいりて
またも大波うちよせて
いぶかしや波にまがはぬ

あはれ危ふき船子らよ
斯るなりけり

いざや楫とり心せよ
船は虚空になりけるよ
あらざりけり

船は奈落におちいりけり
いかさまにかはなりにけり
ものゝひゝきは

衝き合ふ程なくくつがへり
またゝくひまにしづみけり
つかの間によるべなき身と

にはかに響くさけび聲
いかづちのごと轟きて
さらにまた音まさりゆく

涙をしのぎてつはものら
あらしの音のたえ間には
ふけゆけば荒のみまさる

さもいかめしき黒船も
火玉におぢぬつはものも
なりにけるかな

たける海よりもの凄し
やがてあらしに埋れけり
沖つあらなみ

さらにしばしはおよぐなり
くるしむてゐ音きこゆなり
大うな原

またも寄せくる死のあだに
くらき波路に浮き沈み
からくしてあぐるかうべも

わかれをつぐるさけび聲
さらに夜あらしふき立て
小夜千鳥なく音いたくも

見えつかくれつなきからの
うつせみの世はうたかたの

あだせん力も堪えぬるか
もらすさけびもされなれや
いとちからなし

ろらまでひゞくものすごさ
あるゝしほ路のおろろしさ
さえまされ

たゞよふすゑはいづこぞや
泡をためしにひかましや

はろびゆく人のかずこそ
ゆめとみし世はゆめならで
つねなきうちにつねありて
なみかぜのさはがぬみちは
むくらも迷ふやみのろら
あらなみくるふさけびなだ
いつまでも恨(ウラミ)に深し

里の朝

さら〳〵と昨日も今日も
多かりけれ
うつゝならざる時もなし
死の手をもれん人ぞなき
あらじとぞ思ふ

あらしにのこるさけび聲
れに火にのこる魂魄(タマ)のかげ
千尋の海原

紫苑山人

おときよみふしもたがへす
我か宿の軒にながるゝ
谷川の岩におりたち
朝手水結ばんとすれば
有明の殘んの月は
わが山の若竹がくれ
ほのめきて星の光も
やうやくに消えつゝゆけば
遠近の茅が軒端に
には鳥の塒を出でゝ
こけこゝと羽ばたきしつゝ

なきつるはいとしき妻や
ゝふならん森のあなたに
折々に里守る犬の
吠えつるは目にし見なれぬ
旅人の過くるなるらし
ろよ〳〵と峰より下ろす
松風に狹む霧のヴェール（覆面）
やうやくに吹きはれぬれば
天地のよべの眠りの
ゆめさめて胡瓜夕顔
里芋も畑てふはたの
豆の葉もひらり〳〵と

打なびき廣き稲田も
蒼々と笑まひの波を
たゝゆればこぼるゝ露の
白珠の寶を拾ふ

人や誰くはを肩にし
破笠を手にし提けつゝ
しづの夫の二人三人の
あとやさき名なき野草の
匂ふなる里の細道

踏みわけてかたみに合はす
ひな歌はれやの親より

傳へ來し調べなりけり

詠史

本居豊穎

よしやあだなみ立たばたて
君しばらみともならざりし
波風あらひしあまりとて
うな坂せきけんわたつみの
城の名におふちはや人
小島の末まで一すちに

水上清き宇多川の
うき瀬の果ころ悲しけれ
大御劍さの海の底
神の守もろはぬ世か
ろのうち川はたち花の
濁らぬ名をころとゝめけれ

勇士

同人

額にいた手はおはゝおへ
むかふ野山のつゆよりも

ろびらは見せじ君が爲め
いのちはかろし名は重し

花は櫻

花はさくら朝日たゞさす
　雪はときわふしのみやま　　同　人

光くもらぬ玉かゞみ
　みいつかゝやくとつか劍
　みかけ〳〵やまと魂
　あふけ〳〵天つ日つぎ　　同　人

海軍

空みつやまと　みくにの爲に
　くろかねはりたる　いくさ船
　ごころかためし　いくさ人

命も妻子も　何にかおもはむ
たゞ名ををしめ　ますらをたけ雄

催馬樂　擬吾家　　横山由清

山のはに夕日のかけは
　かくれたり
　　あかすもいさや歸りなむ
家つとに何よけむ
　　櫻山吹藤よけん

閑庭の虫

露にふしたる草の葉は
　さながら月のすみかなり

石原月雄

ふけゆく夜半の靜けさに
なくねもしのべ庭の虫

四季

萩原弘濟

なくやひはりの聲聞て
長き春日をろこはかと
いとゞ短き夏の夜を
窓もる月と見るうちに
萩ふく風の音ふけて
たれとふ人もなきやどに
軒端をすくるこがらしの
衣かたしき獨りねの
心ものべに糸遊の
花にうかれて暮しけり
くひなに夢をさまされて
鳥なくなりあけのろら
寢覺めがちなる夜もすがら
なみたをさろふ雁の聲
音たに寒きさむしろに
夢おどろかす夜半の鐘

春の花

春の景色を見渡せば
花なき里ぞなかりける
いろ香愛たき其はなも
憂き事のみぞ多かりき
雪降る夜には枝を折り
あつまりつどふ憂き事の
耐て忍びし甲斐ありて
斯く咲き出るぞ愛てたけれ
其身の上によろこびの
しりなば なにか憾むべき
野の末山の端までも
今を盛りに咲き揃ふ
過し越し方尋ぬれば
霜ふる朝には葉を落し
枯れしとまでに眺られ
つもり〳〵し其中に
のどけき春にめぐりあひ
世のためにとて誓して
花のつぼみは憂事と
春の花ころためしなれ

春の花ころめでたけれ

詠史

武士のいしずゑとしもたゝえつゝ
　ろの名かれせぬ楠の
　　やまと心のくもりなく
　　君につかへて國のため
赤坂山にたてこもり
　あるは千早に吹きれろす
　　おろしの風にかたきらは
　　たまりもあへず散々と
ちり行きにけりかの本の

いやつきしゝに打寄て
　又引かへし攻めくれば
　　今を限に死なばやと
心極めて櫻井の
　里にかはれる言の葉を
　　子に教へつゝのこしおき
　　其身はやがてつはものを
うちしたがへて湊川
　ろてをふかみてまごゝろに
　謀りしことも泡となり
　　消ていくさの敗れると

かねてかふぞとろらにみつ

やまと心は三よしの丶
花とちりてきあはれさを
はやくも仇のつたへきく

しばしまどろむ夢をさへ
驚かなんとむらきもの
心をつぎて君がため
つくす心はたゆみなく

家につたへしみたらしの
梓のゆみのなきかずに
いるてふ事を記しおき

よしの丶山のかほれるも

實にたくひなき丈夫の
親子はらからのこらずも
國をまくらになしてける
あかき心を今も世に

傳へきくだに身もさむく
なりにけるか那
あはれますらを

夏花所感

晝の暑さは夕立に
かゞやく月におきはすれ
洗ひながして峯たかし
千草のつゆのはら〳〵と

玉をあざむく玉だれの
いとも涼しき紫竹の
うたがふ斗り音細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さかなくも愚かにも
蚤蚊やはへと打つけて
おもひを焦す螢火や
忍ぶのきばの橘に
訪ふ人もなき草の戸を
靜に見れば四ツの時

おすの返しに吹ちりて
葉越しに秋や來ぬるかと
庭のかけしもきこゆなり
おしみし春の宵よりも
あたひを誰かさたむへき
夏はうるさしまた暑し
貶して云はいはずして
昔しの人の袖の香を
初音をもらすほとゝぎす
叩く水鷄にやぶらるゝ
しらで寐過す人ならん

物の哀れは夢にだに
われを慰め樂します
今の目あたり覺たる
つゝむとすれは夏衣

花月の歌

月と花とは昔より
たがよろこばぬ人やある
心につれてうき事の
足柄山のかせすごく
これより多く陸奥へ
死ぬか生るか白河の

うつり變りて物ごとに
深き方儀をゆくりなく
ろの嬉しさと樂しさに
吹返したる峯の松風

誰か樂まぬ人やある
さはさりながら月花も
種となれるも多からん
松の風ろふ簫の音も
いくさといへは身の末は
關をば雲や隔つらん

勿來の關の春のくれ
都の空は花ぐもり
櫻のゆきは將軍の
戟の枕に夜はなれて
越路の山の月白く
故郷の空にかへるぞと
花の都はあれはてゝ
今宵一夜の宿たのむ
滅亡てゝにきわたりて
佞人ばらの說により
二人ともなき賢臣は

駒をとゞめて眺むれば
鎧の袖に散かゝる
びんの霜より尙白し
秋のあはれは知されぞ
雲間をわたる雁が音も
思へば我もなつかしし
何處が我身のおきどころ
櫻のつゆにろでぬれて
平家の末ぞ悲しけれ
諫めの言葉いれられず
筑紫の浦のわびずまい

御衣をさゝけて涙なる
我君今は賊のため
無念のこゝろやるせなく
我が赤心申さんに
月の光や花の香や
更に變りはなきなるに
月をみて醉ひ花を見て
只一條のゆめの間に
世のなり行ぞ無常なれ
上には君を煩はし
國の亂るゝろの時は

心の底は如何ならん
遠き島ぢに行たまふ
十字をしるす櫻木の
なぞか多言を要すべき
いく萬年を經るとても
常なきものは世の治亂
ねむれる春の手枕
うつる興廢存ぼうの
若しも世運のつたなくて
下には民を苦勞させ
月の光はかゞやくも

花の色香は匂ふとも
されば世間の諸人よ
くにの光を東海の
國の譽を三吉野の
するころ今の務めなり
樂しき月見して見たや

をがは

鶯やくひなの住かより
にはかに流ぬけいでゝ
柴の葉がくれ光ゆく
谷間をさして急ぎつゝ

なぞ樂のあるべきぞ
今より眞心ひきおこし
月よりも何かゞやかし
花よりも尙芳ばしく
ちかつて斯もなせし後
樂しき花見して見たや

てにろん卿作

百の小山のろばをすぎ
有るは岩角折かすり
千々の村里添ゆけば
行橋々かくゞるらん
眞砂路越て樣々に
語りさゞやき聲立てゝ
入江に泡をうかせつゝ
さゞれの上に畫くなり
畑にろゝぎつ田に入りて
萩やすゝきの茂りたる
堤の本をうちめぐり

うぬり〳〵て歩みゆく
行道すがらさわ〳〵と
大河さしてすゝむなり
人は行きもし來もすれど
我は行くのみ何時までも
右や左へまはるうち
のせ行く花の美くしさ
いとすこやかに彼方此方と
遊ふやまめもみさるなり
黄金のさゝれ打越て
立つさゝ波に白銀の

口泡をろてこゝと
ろはいてをのが旅路を
重ね行く小柴や盧を
打逢棒のこかくれ
くゝりて我忘るなと
咲く花を打なびかする
時もあり群る燕の其中を
かけつ脱りつ行程に
おのが淺瀬に沈む日の
光をぞらす折もあり
月星しろき眞夜中に

野にさゝやくは我一人
ねせきものとに落留り
小草のますりたゆたひて
再ひこゝを立出て
大河差して流るなり
人は行もし來もすれど
我はゆくのみいつまでも〳〵

平野國臣、僧月照

花の都も秋は猶
夕へ淋しき風情なり
名は流れたる眞清水や
落ち來る瀧の音羽山
秋の葉いろの講ごとに
散るや紅葉のちり〳〵と

亂ゆく世の涙花江や
猶世の爲に身をつくし
蘆のさはりは繁くとも
盡さんとても筑紫潟
波影の岸の波ならぬ
操をいつかふか綠り
いろは變らぬ青柳の
驛路を越て香椎(カシヒ)潟
たゞの橋をば打渡り
千代の松原千代かけて
萬代かけて君が代の
千歲の松によろへつゝ
神に歩みを箱崎の
社にかけし四つの文字
筆の主をよく問へば
延喜の帝畏くも
御手をば下しませりつゝ
爰もむかしは石疊み
かさね〳〵し白涙の
よせし昔を忘れじと
恨み浦半の片たすき
かけて歎くも憐れなり

沾衣塚の濡ところも
やがて博多の假住居
又行く方は薩摩がた
心ろ細くも都にて
たよるは心つくし潟
語ふひともうき枕
せき留られて又ふねに
涙にゆられて行先に
頓て鹿兒島かごの島
又こがらしに驚きて
日は神無月聖の夜

吾身に着たる心地せり
こゝも涙風さはがしく
冲の小島にあらねども
誰かあはれと思ふらん
一人の外に打あけて
野間の關屋のせき守に
乘るも夫れと寄りがたき
黒の瀬戸てふ名もうしや
翼さ縮めて潜みしが
日向をさして船出せし
傾く月とともに

照り輝きてくもりなき
茲に一人の薩摩人
契りも深き船の中
乘合人もふね人も
さりとは知らぬ白涙の
猶東雲のあけがらす

桃太郎出陣

なんじよ汝桃太郎
ろのしま人を能なづけ
しまの寶をとりかへり
人にもみせて喜ばせ
身は大君の御爲とて
如何なる縁し先の世の
底のもくずとなりぬるを
擢の雫も露はども
立さわげども甲斐ぞなき
なくより外はなかりけり

福羽美静

早ろの島へ行ならば
日本の德も蒙むらせ
天皇陛下にたてまつり
汝のいさをゝ顯はさば

我等も汝の父母と
まことに汝の父母と
まことに汝はきみに忠
あらよろこばし桃太郎
我が日の本は神代より
御位榮ゆる國なるぞ
能ある人を能く用ゐ
神武天皇かみよより
國をひろめて人をまし
人の誠のつとむべき
千代に八千代に其先に

汝のいさをゝ顯はさば
人によはるゝ事ならん
まことに汝は親に孝
汝の心に記臆せよ
いく百代の天皇の
さてろの國の國體は
劣れる國をよくたすけ
請つぎませるはかりごと
月々ものをさかんにし
業のかぎりをつくさせん
桃の花さき實をむすぶ

限なきまでさかへゆく
議員となれる事あらば
小なる事にろねみあひ
國にたいして罪なるぞ
をさなきときは幼稚園
心の器量を大にもち
ろれをば互にせぬ物と
汝は目出度ものなるぞ

もしも其まに桃太郎
國の事業を大にせよ
國の事業をあやまらば
サアはたらけよ桃太郎
學校勉強におこたるな
ちいさき事のほめろしり
こゝろにかけよ桃太郎
汝は目出度ものなるぞ

明智左馬之助湖渡

琵琶の湖渡らんと
水ぎはちかく乘出たり
天をひたして底もなき
いさめるこまを丈夫は

比叡の山より立のぼる
きらめき渡る水の面は
雲の如くにむれつどふ

朝日のかげの浦もせに
波かくすとも思はへず
敵も味方も音をのみて

うちぞまもれる丈夫も
神よまもれな我はいま
ともに死べき身と魂の

心に幸(サチ)をぞいのるなる
往くもかへるもとゝまるも
まかせて君がまゝなれば

頼む双手もけなげなれ
てゝろ後れて失せにける

項羽はほろび義仲は
かたき旅路に我あらば

駒もいでてよもろともに
生死の波をかきわけて
あなやうちてむ鞭風に
すぎて消ゆく岸邊には

はまれの海のはか海か
いでや沈まむもろともに
ちる玉あわの花ふゝき
波うちかへす鳴(ナリ)のおと

沖にいづればひと羽の
嵐のさがかさりなから
あやしの四方の高峯より

駒の立がみうつなみは
後のてゑぞいやたかき
七重八重たつ黒雲に

空かきくもり日ばくらく

はや岸の音もかすかなり

やがて波間に烏羽玉の
小島に通ふとりもなく

見れば天地まふたつに
天銃(アマツツチ)すごくますらをか
雲の流のあめあらし

逆まく波に目もくれて
いでや死べし和田つみの
死ねや勇めと玉の緒も

あやめもわかぬ闘なれや
こまの波かく音ばかり

さく電光となるかみの
うなじを的に打くだす
むち取かはす程もなく

あやうし駒もますらをも
泡か藻屑かもろともに
絶えなむ手綱ひきしむる

さはれ海路のかたき程
風の浪きる鞭うけて
世に此海を渡りかね

友はしげにぞたち迷ふ
今はあなたの水ぎわに
おのがよはひを其君に

あらしははれて丈夫の
比叡の山に出る月鏡み
雲井はるかに寫留けり

渡る心もいやたけく
こまは蹴たてし水烟り
うらみに死にし亡魂の

裳をあたりのはらいゆく
つくやつかれし愛駒は
ゆづりて斃る砂の上に

岸に飛ひ立つ面かげを
雲井はるかに寫しとめけり

源廷尉

我父いかでおはさぬか
伏見の里の雪の中
始めて聞ころくやしけれ
鞍馬の奥に人となり
輿さんものとおさなきに
心をくだき身をきたへ
眼をさらし氣をひろめ
家の白旗おし立てゝ
鐵揭(カイ)が峰さかおとし
めざす仇をばほろぼして

我母いかに成り玉ふ
すぎし昔を人づてに
年は十二の春よりも
世に衰へし家の名を
夜はよもすがら兵法に
晝はひねもす文學に
月日つもりし其末は
平家の支を打なびけ
八島の海やだんの浦
今に其名はつたはれり

春の眺色

春の景色を見渡せば
吹く春風のあたゝかさ
鳴く鳥の音の長閑さよ
袖を拂ひて人に媚び
われを招くの風情あり
最とゞ操をぞすかゞみ
人の輿にやうかれけん
或は菜の葉に戯むれつ
見れば眼をよろこばし
西に東に耳に聞き

四方の野山の雪解て
咲く花の香の芳ばしさ
むめは笑を含みつゝ
やなぎは風に靡きつゝ
まつは常盤の色變へで
雲雀も蝶も黄鳥も
木の間青空さへづりの
野邊にあかざの杖曳きつ
聞けば耳根をたのしまし
北に南に目をふるる

初音も緑り黄金なる
心を慰めざるはなし
愛てへきものは多けれど
眺めは爭で忘られん
詩にも歌にも巧なる
得てころ寫すろのさまは
唯り占ふへきものならず
いづいるにても見らるべき

錦のいろも皆共に
夏秋冬の眺めにも
分て東風吹く春の日は
如何に書に畫に又文に
風流才子なればとて
さは言へ春は天地のみ
我身の春の來る時は
早く見まほし聞まほし

万情万眉 終

明治三十三年十月七日印刷
仝　三十三年十月十日發行
（定價金拾六錢）
著作權所有
編輯者　今井菊堂　東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　大月隆　東京市神田區錦町一丁目十番地
印刷人　長谷川辰二郎　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所　同志社　東京市神田區錦町三丁目一番地
發兌元　文學同志會　東京市神田錦町一丁目十番地

●文學同志會出版圖書目錄●

大阪備後町四丁目　盛文館
東京神田區雉子町　山本鐐藏
東京京橋區弓町　松村三松堂
大賣捌

美妙

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の艶ある事及び音樂より來る美等如何に人生に快樂を與ふる賜あるか本書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛立の妙美あり

定價二十錢
郵税四錢

人生の目的

定價二十五錢
郵税四錢

●第一章緒論●第二章飲食主義●第三章勤勞主義●第四章競爭主義

●第五章知識主義●第六章良心主義●第七章忠孝主義●第八章幸福釋義●第九章自愛主義●第十章他愛主義●第十一章兼愛主義●第十二章保存主義●第十三章飲食主義●第十四章勤勞主義●第十五章競爭主義●第十六章知識主義●第十七章良心主義●第十八章忠孝主義●第十九章自愛主義●第二十章他愛主義●第二十一章兼愛主義●第二十二章保存主義●第二十三章結論

人生の初旅

定價二十錢
郵税四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未聞快絶の實行録あり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の記録と思ふて可あり

人生の老旅

定價二十錢
郵税四錢

世に不幸の人多しと雖もおのが涙の洩し場なき人ほど苦痛の人はあらざるべし人生の老旅は是等の人の情友とあり人おき處に於て深く兄姉に同情を表し其煩悶を慰むべし本書は人生の初旅の後篇あり初旅を讀む人は必す後編を讀まざるべからず

人生の悔悟

定價二十錢
郵税四錢

●父母に別れし悔悟●婚入りをせし悔悟●學問を學びし悔悟●物を輕信せし悔悟●都會の飲食物●人を信用せし悔悟●交際を擴めし悔悟●失望の悔悟●一期の失望●二期の失望●三期の失望●四期の失望●都會にありし人の悔悟●富家に生れし人の悔悟●時間を徒費せし悔悟●物に溺れし悔悟●喫煙を始めし悔悟●身を虚弱にせし悔悟

斷巖絶壁

定價三十錢
郵税四錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるものにして其趣

味の深厚なるは言はずもがな、本會に於て出版せり盛夏綠陰の下本書を繙かは心神自ら清涼に浴するの感あらん

人生の氣力　定價廿五錢　郵税四錢

船舶波を犯して走るは蒸氣の勢力あるを以てあり社會の迫害を排して能く身の安全を圖らんとせは須らく呑海の氣力を養はざるべからず本書は即ち吾人の蒸氣力也

吾人の生活　定價廿五錢　郵税四錢

本書は文明の生活なり内地雜居後の生活なり日本人としては文明的社交を知らんと欲せは本書の他に其友なし

風月萬象　定價三十五錢　郵税六錢

松風吟月　定價三十錢　郵税四錢

人生の片影　定價十錢　郵税貳錢

鴨長明海道記　定價十五錢　郵税貳錢

廻國雜記　定價二十錢　郵税貳錢

馬琴妙文集　定價二十錢　郵税四錢

詩文散文序文美文碑文箴文戲曲座右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるものあり

立身の事蹟　定價二十錢　郵税四錢

世には失策を以て充たせり失策せぬ先に失策に陷らざる方法を講ずるは立身の急務なるべく古今の聖賢と座右に親談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ね以てこれを師とし友とするもの豈立身せざらんと欲するもそれ得べけんや

山高水長

定價二十錢
郵税四錢

禪學斷片

定價二十五錢
郵税四錢

禪學の妙味を味ふるの人は能く世に處し人に交る蓋し禪機は悟道の奥意なり此書は深遠なる禪を通俗に記述したるもの必ず一讀し置かさる可らず

艶麗文粹

定價二十錢
郵税四錢

艶中の粹を拔き麗中の粹を集めたるもの文筆に志すものは勿論其他

坐右の快を貪らむと欲する人はこれを伴侶とせよ瑤音玉聲の耳を驚かすに足るものあり

滑稽妙文集

定價三十錢
郵税六錢

一讀頤を解き臍の處を換へしむ殊に其妙あるもの而已を集めたれば須らく腹帶を締めて始めて此卷に向ふ可し

人物の裏面

定價二十錢
郵税四錢

人物の表面は皆人の知る所なり而して其心の異る恰も其面の如し本書は各種の人物の裏面を遠慮なく描き出して隔靴掻痒の感なからしむ且つ寸鐵殺人的の鋭鋒を以て其肺腑を抉出し照魔鏡に照らして殆ど閻羅王の前に立つの思あらしむ貴者も賤者も富者も貧者も男子も女子も座側に一本を供へて規戒とせば蓋し邦家の幸あり

戲曲妙文集

定價三十錢
郵税四錢

戯曲は我國に於て東西に誇るべきの妙味あり本書は其精妙あるものを收めて遺憾おからしむ

青年の將來

定價二十五錢
郵税四錢

將來の青年は如何にして立つ可きか二十世紀の曙光を迎ひしと同時に大に立場を定めざるべからず來れ幾多の青年汝の前途を指導し光明を與ふるものは蓋し本書の外に求むべきおし

婦人實務錄

定價二十錢
郵税二錢

本書は婦人の實際毎日に心得さるを得さる教訓心得方針を信切に說き示したる者にして苟も婦人として知らざる可らざる案内書なり

伊蘇普戯傳

定價十五錢
郵税二錢

研學の順序

定價二十錢
郵税二錢

立身の秘奥は研學の如何にあり其順を得れば成効し順序を失へば必ず敗る本書は此順序を明かに教へ審かに論究せるもの蓋し青年必讀の好書學生無上の珍寶たり

聖僧道元

定價二十錢
郵税二錢

○道元系統○前堤○經歷●彼の幼時●出離解脫●渡唐●歸朝後の彼○彼の生涯○鎌倉時代と禪宗○彼の理想●無常觀●厭世と樂天○宗教家としての道元○晩年と涅槃○附錄●傘松道詠

天然の聲

定價三十錢
郵税四錢

紀行あり隨筆あり詩歌あり漫錄あり新體詩ありて國文漢文其粹を

競ひ妙を爭ふて興味津々讀まざらんと欲して讀まざる能はず春郊綠陰の好友秋宵寒夜の良伴侶たり

天籟万丈

唐朝の文豪韓退之の生涯を評論的筆鋒を以て叙述せるもの其勁切にして痛快なるは讀者の覺えず一讀三歎するを以て知るべしまれ江湖得がたきの文字、當代稀有の好著

定價二十錢
郵税四錢

郊外散策

文章世界の臨時增刊として出てたるもの筆を淺井了意に始めて細川幽齋に終る其間幸名家の傑作紀行集めて本書中にあり殊に世間類なきの珍文にして一々作家の畧傳を添へたるは蓋し千古の名寶たらむ

定價二十五錢
郵税壹錢五厘

虛心談

近刊

（東京ノ部）

東京堂　北隆館合資會社
東京信文合資會社　服部書店
福嶋屋　寶永館
勉強堂　中西屋
青野書店　松江堂
文書堂　田中書店
旭堂　杏文堂
杉盛堂　飯塚書店
赤井堂　山口書店
牧野書店　救濟社
文光堂　赤心社
山陽堂　日新堂

特約大賣捌所

鹿兒島　吉田幸兵衛
久留米　菊竹書店
博多　森岡書店
熊本　芹川書店
佐賀　大坪萬六
松山　向井藏次郎
丸龜　塩田書店
廣島　清水庫三郎
秋田　成見清兵衛
横手　大澤鮮進堂
京都　東枝律書房
掛川　三原屋
沼津　文林堂
弘前　今泉書店

長崎　安中半三郎
大分　甲斐治平
熊本　中山知新堂
佐賀　河内庄助
馬關　上山書店
高松　龜友堂
上諏訪　日新堂
岡山　森博文堂
姫路　木村治作
大津　古川伊助
濱松　谷島仙藏
靜岡　内田瀬代助
名古屋　川毛淺太郎
水戸　木文書店

仙臺　有千閣
豐橋　文海堂
津市　株式會社（關西圖書）
長野　西澤書店
長岡　上田屋
和歌山　津田源兵衛
新井　本柏屋
盛岡　鶴鳴閣
鹿兒島　谷村藤吉
高岡　學海堂
豐橋　文海堂
栃木　宮川書店
岩代郡山　寅屋忠左衛門
長岡　目黑十郎
磐城平　清光堂
仙臺　佐藤養治

山口　桂梅吉
德島　黑崎精二
奈良　株式會社（奈良縣圖書卸賣）
松本　永琴堂
岡崎　伊藤小文司
柏原　中井正吉
新井　文進堂
善通寺　筒井兵林館
金澤片町　字都宮書店
富山中町　小林清重堂
宇都宮　内田書店
岩代若松　荒井陽文堂
八ノ戸　伊吉書店
新潟　北光社
仙臺　木文書店
水戸　川又銀藏

水原西村六平
高田宮越博信堂
敦賀山土宗平
高知澤本駒吉
武生西村書店
博多眞海書店
酒田鈴木喜八
名古屋耐成堂
札幌進振堂
札幌三澤書店
小樽白鳥書店
厚岸港池田運次
青森鎌田政憲
須賀川寶來屋
福井日新館
浦和文華堂

福井直江津井品川支店
高田白川奥村太右衛門
室蘭柿村書店
一ノ關文港書店
福島廣文書店
小諸鈴木萬助
甲府柳澤正文堂
熊谷伊藤書店

四

千葉立眞舍
那覇盛豊書林
台南龍泉堂
台北城谷書店
台中丸野書房
明石藥師寺書店
福島博向書堂
基隆三益堂
岡山本金正堂
越後三條野島平七
長野金華堂
松本鶴林堂
小諸鹽川書店
高知開成舍
濱松郁文舍
佐藤書店

高田高橋書店
台北博文堂
台灣石田書店
中棚書店
福井邊書店
平澤潤書店
小田井書助
竹內彌三郎
岡山原書店
越後三條
長野荻原朝陽堂
松本高美書店
飯田皆川四郎
丸亀開文舍
高知山中專助
下館須藤書店
清森尙堂

青森書店
土浦寺田清平店
土浦長野書店
高崎合同新聞店
前橋喜久屋
足利万卷堂
矢吹三泉堂
本宮吹平次郎
西館深井桃二次
成田一
佐倉田中書店
茂原山田書店
小見川松村清七
高寺田清平

太田書店
土浦宮田書店
熊本寺田時習堂
高崎好文堂
前橋中田書房
桐生黒崎書店
米澤三泉堂支店
須佐權平
(三)近江屋
津野融貫堂
宮崎
八日市場水内書店
佐倉吉田書店
佐倉三成舍
茂原多田屋支店